

## 会社の暴走から身を守るには

9月のダイヤ改正の内容は、すでに多くの方がご存じかと思います。酷いものですね。会社が普段から「安全第一」「お客さまの命を預かっている」などとのたまっているのは、ありとあらゆる責任を現場に押し付けるための口実。そこには「安全」や「命」に対する敬意などみじんもなく「金」が全てというわけです。しかし、行き過ぎた人員削減が重大事故につながり、会社が存続できなくなるほどのリスクを抱えているのは、某観光船の事故からも明白なのに、なぜ、会社は止めないのでしょか？

理由は極めて単純。それは労働者（社員）が闘えないことを知っているから。合理化による事故の可能性を誰よりも予測できるのは現場の人間であるにもかかわらず、それを声に出し本気で抵抗しなければ、会社は体裁良く切り捨てるだけ。これが「資本」の真実です。

全ては労働者の「自己責任」と言えば暴論に聞こえますが、「権利」を侵害され、怒りをあらわにすることもなく現状に甘んじるのは、まともな人間の感覚とは言えません。

以前読んだ書籍「権利のための闘争」（イェーリング 著）の冒頭には、以下のような記載があります。

自分の権利があからさまに軽視され蹂躪されるならばその権利の目的物が侵されるにとどまらず自己の人格までもが脅かされるということがわからない者、そうした状況において自己を主張し、正当な権利を主張する衝動に駆られない者は、助けてやろうとしてもどうにもならない。そんな連中は精神の入れ替えが必要なのだが、そこまで面倒を見てやることもあるまい。彼らの特徴は、身についた利己主義と物質主義である。かれらは、権利を主張するに当たって後生大事に守っている背囊の中味以外の（もっと次元の高い）利益の実現をめざす者すべてを（夢想家）ドン・キホーテとみなすことによって、みずから法の世界の（俗物）サンチョ・パンサたらざるをえないのだ。

もちろん、いきなり「闘いましょう！」と言ったところで、戸惑うだけ。まずは出来ることから。それは、いまの「人間関係」を見直すことです。

周囲にいませんか？不満を打ち明けても、「そんなもんだろ」「言っても変わらない」「嫌なら会社辞めれば？」といった心ない一言で話を逸らし、コミュニケーションを拒否する同僚。単なる「腰抜け」かといえそうではなく、彼らの多くは、職場環境を本気で良くしようと日々奮闘している方々、後輩社員の不満と親身に向き合い助言をしている知性豊かな方々を指し、「〇〇さんとは喋るな」「△□さんは変人だ」といったデタラメな噂を流し続けることで「事実」を歪め、自分の意見さえ持てない病的な環境を率先して作り上げようとします。「会社が怖い、でも、みんな一緒に不幸になるなら超安心」というわけだから、その「実害」は半端ない。

上記で紹介した著者は、同書でカント（哲学者）の言葉を引用し、こう述べています。

「自ら虫けらになる者は、後で踏みつぶされても文句は言えない」

「権利意識」というのは、「本音」を堂々と話せる人間関係を通して生まれるもの。会社と闘う気力、「武器」となる理論を学習する意欲が湧かないのは、この前提が崩壊しているからです。